

<特集「否定、形容詞と連体修飾複文」>

[テーマ企画: 特集 否定、形容詞と連体修飾複文]
まえがき

Negation, Adjectives and Compound Sentences of Adnominal Modification: Foreword

風間 伸次郎
Shinjiro Kazama

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

要旨: 本稿は本号（『語学研究所論集』第23号）の特集「否定、形容詞と連体修飾複文」における33個のアンケート項目に対する25言語のデータを分析・整理し、類型論的な観点からの考察を加えるものである。

Abstract: This report aims to analyze and consider the data of 25 languages for the 33 questions of the questionnaire on the topic of this volume ‘negation, adjectives and adnominal complex sentences’ and add some remarks from the typological and cross-linguistic view point.

キーワード: 否定、形容詞、比較表現、連体修飾複文、関係節

Keywords: negation, adjective, comparative expression, adnominal construction, relative clause

1. はじめに

『語研論集』では、受動、アスペクト、モダリティ、ヴォイス、所有・存在表現、他動詞、連用修飾複文、情報構造と名詞述語文、情報表示の諸要素、に続き、特集の10年目となる今回は「否定と連体修飾」の問題を取り上げることとした。

日本語によるアンケートを作成し、これについて答えていただくことによって、各言語のデータを収集した（なおアンケートの例文本体は本稿の稿末に付してある）。こうして25言語のデータが集まった。これは東京外国語大学にある27専攻語の内の13言語に12言語の加わったものとなっている。

これらの言語を語族別にみると、まずドイツ語、アイスランド語、フランス語、イタリア語、スペイン語、ロシア語、ウクライナ語、ポーランド語、チェコ語、ブルガリア語、ラトビア語、リトアニア語、ウルドゥー語は印欧語族の言語である。中にはスラブ語派の言語が5つもあり、語派内部の異同を知るのに有効である。バルト語派、インド語派の言語を含んでいるのも貴重である。ソロン語、ナーナイ語、エウエン語はツングース語族、（チャハル・ハルハの両）モンゴル語はモンゴル語族、タタール語はチュルク語族であるが、これらは類型的な相互の類似からアルタイ諸言語として扱われることもある語群である。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed/ja>

フィンランド語はウラル語族、中国語はシナ・チベット語族、マレーシア語はオーストロネシア語族、アラビア語はアフロ・アジア語族、グイ語はコエ・クワディ語族、メエ語はパプア諸語トランスニューギニア系で、朝鮮語は孤立語である。アフリカやニューギニアの言語を含んでおり、類型的にも異なったタイプであって、貴重なデータとなっている。貴重な諸言語のデータを寄せてくださったデータ執筆者の先生方やそのコンサルタントになってくださった方々に深くお礼申し上げたい。ただ、複数の語族のデータからなるものの、オーストラリアやカフカース、新大陸の言語を欠いているため、本稿で以下に展開される類型論的考察が不十分であることは否めない。東南アジアの孤立型の言語が少なく、チベット・ビルマ語派やニジェール・コンゴ語族などの巨大語族の言語が一つも入っていないことも大きな問題点である。

2. 否定

2.1. 否定の先行研究における類型論的な知見

Dryer (2005a: 454-457、なお以下の情報は Website 版に拠った) は否定を示す形態素がどのような形式で現れるかに注目して世界の言語のうちの 1,157 言語を分析している。これによれば否定形態素が①接辞である言語：395、②否定辞(語)である言語：502、助動詞である言語：47、動詞と小辞のいずれであるかが明確でない言語：73、否定語と否定接辞の変種である言語：21、二つの要素による言語：119、であるという。否定形態素の形式に極端な地理的偏りはないが、否定助動詞はフィンランドから西シベリアに渡るユーラシア大陸北部で著しく頻度が高く、否定辞は孤立型の言語が多いという理由から、南アジアで一般的であるとしている。二つの要素による言語は特にアフリカで頻度が高いという。否定助動詞を示す言語のうち 8 つはウラル語族の言語である。

Payne (1985: 207) によれば、否定助動詞は 2 つに分けられ、一つは否定動詞が完全な文的補語をとる上位の動詞の一部もしくはすべての特徴を有している言語で、これは動詞文末もしくは動詞文頭の言語に限られるという(トンガ語やフィジー語など)。もう一つは特に語順に偏りがなく、否定が助動詞のようになっているタイプであるという(ウラル語族やツングース語族など)。たしかに Dryer (2005a) [112A: Negative morphemes] と Dryer (2005c) [81 Order of subject, object, and verb] を掛け合わせてみると、否定助動詞で SOV 語順の言語は 15 言語、同じく SVO の言語は 14 言語で、大きな偏りはみられない。なおもっとも多かったのは [SOV/ 否定接辞] の言語 (194 言語) で、次いで [SVO/ 否定小辞] (176 言語)、[SOV/ 否定小辞] (142 言語) であった。否定自体の位置に注目してみると、VO 言語 (SVO, VSO, VOS) では否定小辞は動詞に先行し、(S)OV 言語では先行することも後行することもあるという。したがって OV 言語でない限り基本的に否定は動詞に先行するものようだ。意味的に補文の否定要素が、主節の方に現れるのも (I don't think he will come. のような文) このことが原因であるのかもしれない。Payne (1985) は歴史的に、動詞に先行する否定要素がその後、動詞を挟む形で動詞に後続する否定要素との不連続形態素をなすようになり、遂には後続要素の方だけが残る構造へと変遷することがあると述べている(フランス語の *ne...pas* で起きたようなケースである)。Payne (1985) はさらに、ウラル語族の内部で、SOV 語順の言語が SVO 語順に変化するにつれて、否定動詞の屈折が失われ、小辞化していくことを例証している。

Payne (1985)、Miestamo (2005a) は、否定が語順の変更、トーンの変更、時制やアスペクトに関わる対立の解消、名詞項の格の交替などを伴うことを指摘している。Payne (1985) によれば、ムードによって変化する否定小辞はハンガリー語に、テンスやアスペクトによって変化する否定辞はセム語派の言語にみられるという。

Miestamo (2005b) は肯定文と否定文の構造的な違いが否定のマーカールの有無のみにあるもの 8 つまり

他の違いがないもの)を対称 (symmetry), 肯定文と否定文にそれ以上の構造的差異が認められるものを非対称 (asymmetry) と呼び、否定構造における対称性に基づいた類型的分類を試みている。その 297 言語での調査結果によれば、対称が 114 言語、非対称が 53 言語、両方の否定が存在するものが 130 言語であったという。地理的分布についてみると、まず対称的否定のみがみられる地域は、大陸ヨーロッパの大部分と、東南アジアの大部分であるという。他方、非対称的否定のみを有する言語が優勢な地域はないという。

Miestamo (2005c) は、さらに非対称的な否定の下位分類として以下の 6 タイプを挙げている (: の後の数字は言語数を示している)。

- [1] A/Fin : 否定される動詞の finiteness が失われて新たな finite の要素が付加される : 40
- [2] A/NonReal : 否定が非現実の範疇として標示される : 20
- [3] A/Cat : 文法範疇の標示が肯定文と否定文で異なる : 82
- [4] [1]と[2]の操作の両方が起きる : 9
- [5] [1]と[3]の操作の両方が起きる : 21
- [6] [2]と[3]の操作の両方が起きる : 11
- [7] 非対称は観察されない : 114

Miestamo (2005b: 458) では、「標準的否定に含まれない否定構文には、存在文・繫辞 (copula) 文・非動詞文の否定、従属節の否定、および命令法などの非平叙節の否定などがある」としているが、「これらの否定表現はここでは考慮しない」としてそれ以上扱っていない。

否定の実現する意味やスコープについて考えると、何らかの焦点にのみ否定のスコープがかかる場合、述語や文自体は否定されない、ということが起こる。例えば本稿のアンケート[19]「私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない」では、「言わなかった」わけではなく「言った」のであって、否定のスコープは文中のある焦点部分にのみ機能する。。Payne (1985) では Klima (1964) による 3 つのテスト (付加疑問 (did he?), 累加 (and neither did I), 回数 (not even once)が文末に付加可能かどうか) によって「標準的な」否定 (つまり命題の否定が起きているもの) であるか否かを判定している。Payne (1985: 199) は、「名詞述語でないものは、文全体に否定が及ばないことが多い」としている。

以上の先行研究の知見を踏まえて今回のデータの分析を行うこととする。

2.2. 名詞述語文と存在文、形容詞述語文、動詞述語文の間における否定の異同

名詞述語文の否定は、単にコピュラの否定形を用いることで済まず言語と、特別な形式 (例えばトルコ語における *değil*) を用いる言語がある。

中国語をはじめ、存在文と所在文の否定に (述語の語彙などに) 大きな違いが現れる言語がある (中国語学でいういわゆる存現文の問題)。これは情報構造と語順の問題と大きく関わっている。存在の否定は「有らない」とならず不変化詞である言語もある (例えばツングース諸語)。

否定は特に孤立型言語での品詞分類の基準となる。これは「形容詞」の位置づけに関して特に問題となる。Stassen (2005a) では叙述形容詞が動詞的な形態を示すか (encode) か、非動詞的な形態を示すか、もしくはその両方であるかについて 386 言語について調査しているが、その結果、①動詞的なのは 151 言語、②非動詞的なのは 132 言語、③両方がみられる (ここには交代型と分裂型が共に含まれる) のは 103 言語であったとしている。その第一の分類基準は動詞型の人称変化で、これがない場合、コピュラを用いるかどうかを第二の分類基準とし、これも使えない場合の第三の基準として否定をあげている。地理的分布についてみると、まず非動詞的タイプは東南アジアと北西コーカサスを除くユーラシア大陸

全般、およびオーストラリアとニューギニアに広がっているという。他方、動詞的タイプの大きく連続した地域はアフリカ、東南アジア、太平洋島嶼部、北米アメリカ大陸にあり、混合的タイプは動詞的タイプと非動詞的タイプがぶつかる地域にみられる傾向があるという。

以上のような点に注意しつつ、今回の調査の対象言語における①名詞述語文と②存在述語文、③形容詞述語文、④動詞述語文の間における否定形式の異同についてみると、次のような結果が得られた。なお動詞述語文には自動詞の否定を調べるアンケート文（(10)「今日はその人は来ない」）と他動詞の否定を調べるアンケート文（(11)「その人はその本を持って行かなかった」）を用意した。

まず四者のどれにおいても、すなわちどの述語文でも同じ否定形式を用いる言語は、フランス語、イタリア語、スペイン語、フィンランド語、ポーランド語、ウルドゥー語であった。フィンランド語を除き印欧語族の言語であり、ウルドゥー語を除きヨーロッパの言語である。一般に印欧語族の言語、特にヨーロッパの言語は述語の種類の違いに対して無頓着に常に同じ否定形式を用いていることがわかる。その根本的な理由はコピュラ存在である。名詞述語文も形容詞述語文も、さらには存在文にも（動詞である）コピュラが使われるために、結局全て動詞文であることになり、否定形式も同じ形式でかまわないという理屈である。

次に、どれか1つの種類の述語文でのみ否定形式が違う言語についてみる。存在文にのみ異なる否定形式を示す言語は、ドイツ語、アイスランド語、ロシア語、ウクライナ語である。動詞にのみ異なる否定形式を示す言語は、チェコ語、メエ語である。以上の言語は、まずヨーロッパの言語ではゲルマン語派とスラブ語派に偏っていることがわかる。逆に言えばイタリック語派の否定要素が述語の種類に対してもっとも無頓着であるということになる。名詞述語にのみ異なる否定形式を示す言語は、モンゴル語、ソロン語である。ソロン語の名詞述語の否定要素は *antu*「違う」に由来するもので、日本の近畿方言にみられる「～（ん）ちゃう」に似ている。

2つ以上の種類の述語文で違う否定形式を用いる言語についてみると、存在述語文に加えて動詞述語文において異なった否定形式を示す言語がある。これは、ブルガリア語、中国語、アラビア語で、前2者では特に動詞のアスペクトが否定形式の選択に関わっている。名詞に異なる否定形式を持ち、さらにアスペクトに関する別の否定形式を示す言語にマレーシア語があるが、これもやはりアスペクトの違いによるものである。ツングースの3言語はまず存在・所在に異なる否定形式を示し、エウェン語では他の否定で否定動詞の諸アスペクト形式が使われ、ナーナイ語では否定動詞がアスペクトにより接尾辞化もしくは小辞化したものが使われ、ソロン語では「違う」に由来する語が名詞と形容詞の否定に使われている。グイ語では動詞の否定に使われる3形式のうちいずれかが名詞の否定や存在・所在の否定では使えない形になっている。朝鮮語では名詞述語文にも存在文にも動詞とは異なる否定を用いる（ただし否定の指定詞は *an-i*と分析することも可能だろう）。タタール語では存在・所在の他に名詞述語と形容詞述語の否定が動詞のそれとは異なっている。朝鮮語の形容詞は形態的に動詞的であり、タタール語の形容詞は名詞的であって、こうした品詞面での振る舞いの違いが否定形式の現れにも影響を及ぼしていることがわかる。

総じて述語の種類による否定をみると、何より存在の否定において、多くの言語で異なる否定形式の用いられることがわかる。これは情報構造の問題で、他では主題となり否定のスコープに入らないうちに来ない主語を、否定のスコープに入れなければならなくなる、ということがその原因であると考えられる。次に否定の形式に影響を与えるのはアスペクトの違いであることがわかる。

2.3. 存在文の否定・所在文の否定 —特に否定の斜格主語を中心に—

特に存在文では、他の述語文とは異なった否定形式が用いられるという通言語的傾向のあることを上述した。他方、同じ否定形で済ませている言語はどのようにして情報構造上の問題を解決しているのだ

ろうか？ まず語順の制約の厳しい英語やフランス語、スペイン語では、特殊な構文を用いることによって非存在の主体を主題／主語の座から引きずりおろしていることがわかる。語順の制約の緩いイタリア語では非存在の主体を否定の後ろに移動している。ドイツ語ではさらに否定代名詞 (keiner) を用いている。他方、所在の文ではどの言語でも通常の語順の通常の構文に否定が付加された構造が現れている。

一方、格変化のある言語には、ロシア語で「否定生格」と呼ばれる現象、すなわち存在の否定される名詞は属格などの斜格にする、という現象の観察される場合がある。これは一つには主格形が主題になろうとする性格を持つのに対し、存在では非存在の主体を否定のスコープ、つまり題述の方に入れる必要があり、そのために斜格に降格して動詞等に統御された形にしようとするためであろう。否定の主体は非現実の存在であって、不定であることもまたもう一つの重要な原因だろう。むろんこれは Hopper and Thompson (1980) にあるように他動性の観点からも説明がなされている。

今回の調査対象の言語の中では、フィンランド語 (分格)、ロシア語 (属格、以下の言語も)、ウクライナ語、ポーランド語、リトアニア語、ラトビア語に否定の斜格が観察された。ウラル語族と印欧語族のバルト語派・スラブ語派にまたがっているが、地域的には連続している。これらの言語には基層言語としてのウラル諸語からの影響を中心とした言語接触が考えられ、これらの言語は Koptsevskaja-Tamm and Wälchli (2001) をはじめとする一連の研究では「環バルト諸語」(Circum-Baltic languages) として扱われている。他方、同じスラブ語派でもブルガリア語は格変化を失っているので、否定属格は当然ぞんざいしないが、格変化のあるチェコ語でも否定属格がみられない (これはドイツ語の影響によるものだろうか)。

否定斜格を示す上記の言語でも、所在文となると、その主体は主題となり否定のスコープからはずれ、基本的に主格で現れる (フィンランド語、ウクライナ語、ラトビア語)。ロシア語とリトアニア語のデータでは「その本はこの部屋にはない (他の部屋にはある)」という意図を示す場合には、「本」は主格で現れると説明されている。ポーランド語のデータでは属格の文しかあがっていないが、ロシア語やリトアニア語と同じ状況であると考えられる。

2.4. 他動詞文の否定 —特に否定の属格目的語を中心に—

フィンランド語の他動性において有名な現象だが、他動詞の否定文では、その対象が対格でなく、分格になるという現象がある。

このことは印欧諸語のうち、バルト諸語とスラブ諸語の言語に観察されるが (ただし格は属格)、今回の調査例文 (11) では、それぞれの語派の内部で違いがみられた。

目的語が属格になる言語：リトアニア語、ウクライナ語、ポーランド語

目的語が対格のままの言語：ラトビア語、ロシア語、チェコ語

なお 2.3. 節で述べたようにブルガリア語には格変化がない。

ロシア語でも全面的、一般的な強い否定では他動詞の目的語が属格になる (cf. *On nikogda ne pišet pisem* 「彼はいつだって決して手紙を書かない」) という。Koptsevskaja-Tamm and Wälchli (2001: 655) は、この問題についても、環バルト諸語における目的語の主格／属格標示の問題として扱っている。

2.5. 部分否定と全部否定

Haspelmath (2005: 466) は ‘nobody’, ‘nothing’, ‘nowhere’, ‘never’ に直訳できる語を、「否定不定代名詞」と呼んでいる。その上で、これらが①述語否定と共起しなければならない言語、②共起しない言語、③どちらも観察される言語、④否定の存在述語を用いて表現する言語、の4つに分類している。①は例えばロシア語 (*Nikto ne prišel.*)、②の例はドイツ語 (*Niemand kam.*)、③の例はスペイン語 (*Nadie vino. No vi nada.*)、④の例はネレムワ語 (オーストロネシア語族、例は省略) であるという。Haspelmath (2005) の

調査した 206 言語のうち、②は 11 言語、③は 13 言語で、そのうち 17 言語が西ヨーロッパと中央アメリカに集中しているという。④の否定存在述語による言語はポリネシアのオーストロネシア語族の言語に局在しているという。

他方、Haspelmath (2005: 466) は否定不定代名詞は、(i)疑問詞ベースのもの、(ii)一般名詞ベースのもの、(iii)その他、に分類できるとしている。ここで(i)は日本語の「何も」、「誰も」のような要素も含んでいる。すなわちここで Haspelmath (2005: 466) のいう否定不定代名詞とは ‘nobody’ のような「本来の (inherent)」ものだけでなく、‘anybody’ のようなものも含む広い概念であることに注意する必要がある。

本アンケートのうちのマレーシア語(野元 (2010))にあるように、英語の ‘All that glitters is not gold.’ は全部否定と部分否定の両様の解釈を許すという。今回調査した言語の [数量の全部否定] 「(12) 全ての学生が参加しなかった／学生は全員参加しなかった。」と [数量の部分否定] 「(13) 全ての学生が参加したわけではない。」の例文において、「全ての学生が参加した」にあたる文をデフォルトのやり方で否定した文が {全部否定／部分否定} のどちらの意味を実現するかについてみると、これは二つのグループ (どちらもデフォルトの否定では表現されなかった言語を含めると、三つ) に分かれることが分かった。

[A]全部否定になる言語のグループ: ウクライナ、ポーランド、チェコ、ラトビア、リトアニア、中国、朝鮮、モンゴル、ウルドゥー、アラビア、タタール、マレーシア、メエ、グイ

[B]部分否定になる言語のグループ: アイスランド、フランス、フィンランド、ロシア

[C]どちらもデフォルトの否定では表現されない言語: ドイツ、イタリア、スペイン、ブルガリア、リトアニア、ナーナイ、エウエン、ソロン

[A]のグループの言語は、何らかの方策によって部分否定の意味を実現しなければならないが、上記の 14 言語のうち、下線を施した 8 言語において、日本語にもみられるような「埋め込み」が観察された (なお[C]の 2 言語でも埋め込みが観察された)。[A]のグループの言語も埋め込みの手法も、(特に西ヨーロッパの) 印欧諸語以外の言語に大きく偏っていることがわかる。

他方、[B]の言語はフィンランド語以外は全部印欧語族の言語で、それも全て地域的にヨーロッパの言語であることがわかる。ではなぜ[B]の言語では部分否定の方がデフォルトの否定形式で表現されるのだろうか? 筆者はこれらの言語のデフォルトの文が有題文でありかつ述語焦点である点にその原因があると考え。SVO 語順の言語における S は基本的に定の名詞であり、さらに主題となる強い傾向があることが指摘されている (野田 (2004), 風間 (2019))。[B]の言語のうち、ロシア語は自由語順の言語であるが、他は SVO を基本語順とする言語であり、ロシア語も主題を文頭におく強い傾向を持っている。したがってこれらの言語では (主語が定である) 有題文と解釈される傾向があるために、否定のスコープは次の下線部 (「全ての学生が参加しなかった」) のようにはならず、対比焦点的な主題として実現し、次の [] に焦点が当たった 「[全ての学生] は参加しなかった」の文のように実現するものと考えられる (つまりは部分否定の解釈となる)。

このことは[C]の言語のうちのヨーロッパの言語、すなわちドイツ、イタリア、スペイン、ブルガリア、リトアニアにも当てはまると考える (これらの言語は基本的に SVO 語順の言語である (ドイツ語は定形第 2 だが、主節でもっとも頻度の高い語順はやはり SVO である))。ツングース諸語のうちナーナイ語とエウエン語で、全部否定が [疑問詞+累加] の形式によって表現されたのは媒介言語のロシア語の文がそうだったためだと考えられるので、ツングース諸語は本来的には[B]のタイプの性質を持っていると考えたい。

[B], [C]の言語では、したがって部分否定の方がデフォルトになるため、全部否定の方に何らかの特別な方策を必要とする。そこでまず用いられるのが ‘nobody’ や ‘nothing’ のような否定不定代名詞であると

考えられる。今回の調査で全部否定に際して否定不定代名詞を用いていたのは、ドイツ語、アイスランド語、ロシア語、ブルガリア語、リトアニア語であった。他方で、ヨーロッパの言語には部分否定の方で否定辞を数量等の前の位置に移動する手法も多く観察されたが、これにはドイツ語、ウクライナ語、ポーランド語、ブルガリア語、ラトビア語、リトアニア語があった。ヨーロッパ以外でもマレーシア語、グイ語に観察された。

2.6. 否定の強調

今回の調査では、否定代名詞の出現を調査するため、さらに「(3) この部屋には一つも椅子がない」および「(4) その部屋には誰もいない」という例文を用いて調査を行った。

まず(3)の「モノ」についての結果を示す。

- A. 否定代名詞を用いる言語：ドイツ (eizigen ‘single’も共起)、イタリア、スペイン
 - B. 不定代名詞を用いる言語：フランス、ラトビア、ウルドゥー
 - C. [「一つ」+強調要素]による言語：フィンランド、チェコ、リトアニア、中国(強調要素は“都” dou1「全て」)、朝鮮、モンゴル、アラビア、タタール、マレーシア、メエ、ナーナイ、エウエン、ソロン
 - D. 「一つ 否定の強調辞」による言語：ロシア、ウクライナ、ポーランド、ブルガリア
- アイスランド語では、「一つ」を否定するのみで、強調要素は現れていない。グイ語では、複数形を用いることで椅子一般の非存在を示していた。

次に(4)の「ヒト」についての結果を示す。

- P. 否定代名詞を用いる言語：ドイツ、イタリア*、スペイン*、アイスランド、ロシア、ウクライナ、ポーランド、ブルガリア、チェコ
- Q. 不定代名詞を用いる言語：フランス、フィンランド、ラトビア、ウルドゥー、アラビア、マレーシア、メエ?
- R. 「疑問詞 も」による言語：朝鮮、モンゴル、ナーナイ、ソロン、エウエン
- S. 「一つ も」による言語：中国、グイ
- T. 「一つ 否定強調辞」による言語：リトアニア

タタール語では疑問詞起源の語 (berkem) が用いられていた。

なお*を付した言語についてだが、スペイン語の *nadie* は、動詞の前に生起した場合は否定代名詞的に、動詞の後に生起した場合は文否定要素を要求して不定代名詞的に振る舞うという。イタリア語の *nessuno* も同様の振る舞いをするようである。

総じて否定代名詞を用いる言語は、やはりヨーロッパの印欧語族の言語に完全に偏っていることが確認できる。不定代名詞を用いることで一貫しているのはフランス語、ラトビア語、ウルドゥー語である。「ヒト」に関して「疑問詞 も」を用いるのは東北アジアの言語に偏っていることもわかる。

2.7. 推量の否定

日本語ではかつて推量の否定には *-(a)mai* が用いられ、現在でも文語のみならず「～しようとすまい」となどの慣用的な表現において、口語でも若干の使用が観察される。一方で、否定の推量は現在の口語ではもっぱら基本的に否定に肯定の推量を組み合わせた *-(a)na-i=daroo* が用いられている。したがって、かつての日本語のように推量の否定に特別な形式を示す言語がある程度存在するのではないかと

考え、今回の例文[17]「明日は雨は降らないだろう」による調査を行った。

しかし今回の調査結果において、推量の否定が特別な形をとる言語は極めて少なかった。まず最も変わっていたのはフィンランド語で、「明日雨が降るだろうか!?’のような反語疑問文による表現が観察された。次に、タタール語では通常否定形ではなく、不定未来の否定形 *-mAs* によって推量の否定を示している。他にはリトアニア語でモダリティ的な意味を持つ「もつ」の接続法現在形に否定の接頭辞がつくこと、中国語で可能性を表わす助動詞の方が否定されること、ウルドゥー語の不確定未来の否定では *nahīn* でなく *na* が用いられること、メエ語の否定と推量の形式の連続が固定した特別な表現である可能性があること、などを除くと、推量の否定はどの言語でも、もっぱら推量の文などを通常否定の形式によって否定するものであった。

2.8. 禁止

Van der Aurora et al. (2005) は、禁止が [2 人称単数命令法の動詞構造] と [(直説法) 平叙文にみられる否定方法] の組み合わせであるか否か、に注目し、495 言語について調査して、これらが ① normal imperative + normal negative (113 言語)、② normal imperative + special negative (183 言語)、③ special imperative + normal negative (55 言語)、④ special imperative + special negative (144 言語) に分類される、という結果を得ている。地理的・系統的分布からみると、①は中南北アメリカ・非バントゥー諸語ニジェール・コンゴ語で多くみられ、ユーラシアではゲルマン語派・スラヴ語派・チュルク語派で典型的であるという。②は広域にわたり、東南アジア・極東、ケルト語派、コイサン諸語で典型的であるという。③はヨーロッパでは、ロマンス語派に典型的で、(東)南アジア・ニューギニアを除く全世界に散発的にみられるという。④も広域にわたり、西ヨーロッパ・東南アジア・極東を除いた各地でみられるという。

これに対し、今回の調査結果は次のようであった：

- ①：ドイツ、フランス、ロシア、ウクライナ、ポーランド、ブルガリア、チェコ、リトアニア、ラトビア、アラビア、タタール、メエ
- ②：フィンランド、中国、モンゴル、マレーシア
- ③：イタリア、スペイン、アイスランド (不定形)
- ④：朝鮮、エウエン、ソロン、ナーナイ、日本
- ②/④：ウルドゥー、グイ

およそ Van der Aurora et al. (2005) の調査結果のとおりであるが、朝鮮語は②でなく④とすべきだろう。ツングース諸語の分析も違っていることが判明した。グイ語では通常否定小詞も、もっぱら非現実用いられる否定小詞も、どちらも用いられるので、②とも④とも決め難い。ウルドゥー語では否定の度合いが強い場合に禁止専用の否定辞 *mat* が用いられる。

アラビア語の命令が特別な形式ではなく、単なる述語の 2 人称形であり、禁止も単にその否定による点が注意を惹く。他の言語においては一般に命令や禁止は通常のパラダイムとは異なった形を示す。

なおイタリア語では敬称の場合、否定される動詞は命令形であるので、その場合は②となる。フィンランド語は②としたが、一般の動詞は語幹が命令形であるのに対し、否定動詞の命令形は *älä* という特殊な形であるため、③としてもよいと考えられる。

2.9. 文の否定・否定のスキープの調節

[14]の調査例文「(私は買わなかった。しかし、決して) 値段が高いというわけではない」で「文の否定」と呼んだものと、[19]の調査例文「私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない」で「否定のスキープの調節」と呼んだものは、かなり共通した側面を示すことが分かったため、ここでは同じ節で扱うことにする。

まず、ここで[14]「文の否定」と呼んだものは、日本語で述語を否定して作る通常の否定文でなく、文をいったん形式名詞などにより名詞化してこれを名詞述語の否定形式によって否定するものである。

今回のデータでは、次のようなタイプがみられたが、ヨーロッパの言語はもっぱら補文標識により補文化してこれを否定するのに対し、それ以外の地域の言語ではさまざまな要素による否定が観察された。

A. 「(～ことを) 意味しない」のような表現による言語：フランス、ロシア、ウクライナ、ポーランド、ラトビア、アラビア

B. (理由の) 従属節の前に否定を置く言語：ドイツ、アイスランド

C. 補文を名詞述語文の否定で否定する言語：イタリア、スペイン、チェコ、ウルドゥー

D. 連体形に「こと、話」のような名詞を続け、これを名詞述語文の否定で否定する言語：朝鮮、モンゴル、ソロン

E. その他：フィンランド（「高い値段が理由ではない」のような表現による）、リトアニア（「～とは言えない」のような表現による）、タタール（引用を否定する）、マレーシア（形容詞に名詞述語文の否定 *bukan* を用いる）、メエ（動詞節にしたうえでさらに名詞化して文否定を行う）、グイ（「高くないと知っていて買わなかった」のような逆接による2文の表現とする）、ナーナイ・エウエン（単なる形容詞の否定による）

Bはゲルマン語派のみ、AとCとDにはそれぞれスラブ語派、イタリック語派、東北アジアの言語が多くみだされる。したがって系統的・地域的に近い言語が似た表現を採用しているとみることができらるだろう。全体として、名詞化して否定する点では同じであるが、その名詞化が前置詞節なのか、補文節なのか、連体修飾された名詞なのか、といった違いが現れることがわかる。

次に、ここで否定のスキープの調節と呼んだものは、[19]「私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない」のような日本語の文で、否定のスキープを限定するために「のだ」を用いていることを指す。先行研究でみたように、「名詞述語でないものは、文全体に否定が及ばないことが多い」という (Payne (1985: 199))。実際に、今回の調査データにおいても、何の調節も行わずに、通常と同じように単に述語を否定するだけで、[19]の文において前半の行為の意図のみを否定することのできる言語が多数存在することがわかった。そのような例を示した言語は、ドイツ*、アイスランド、フランス、フィンランド*、ブルガリア、チェコ、ラトビア、ウルドゥー、アラビア、タタール、ソロン*の各言語である (*の言語は他のバリエーションも示した)。地域にも類型にも偏りがみられないので、やはり先行研究のいうように何らの方策もなしで否定の焦点は限定され得るものなのかもしれない。しかしこの点に関しては今後のさらなる研究を必要とするものと考えられる。

他方、(理由の) 従属節の前に否定を {置く/移動させる} 例を示した言語には、イタリア、スペイン*、ウクライナ、ポーランド、リトアニア、フィンランド、アラビアの各言語があった。このことはこれらの言語で否定の位置が比較的的自由であることを示している。

他に、「文の否定」におけるのと同様に、補文の否定による言語には、スペイン、ポーランド、中国の各言語があった。中国語では“我这么说不是惹你生气”「lit. 私がそう言ったのはあなたを怒らせようということでない」のような表現であった。

マレーシア語、朝鮮語、メエ語、ソロン語でも、それぞれ方策は異なるが、基本的に[14]「文の否定」におけるのと同様の表現がみられた。

グイ語では「私がそう言った」「あなたが怒った」「私はあなたを怒らせたくなかった」という3つの内容の等位接続による表現がみられた。

2.10. 目的節の否定

アイスランド、フランス、イタリア、スペイン、ラトビア、リトアニア、フィンランドのヨーロッパの各言語に接続法（ラトビア語では「願望法」）が観察されたが、肯定と否定による違いはないようである。イタリック語派で接続法が比較的保たれているのに対し、スラブ語派では衰退している状況（ポーランド語には「仮定法」があるという）がこうした分布の結果に反映している。ゲルマン語派のドイツ語でも接続法を用いれば「古風」に感じられると記述されていて、ここでも衰退していることがわかる。

目的節の否定に特別異なった形式を示す言語はあまりないようだが、中国語では免得「～しないように」という特別な語彙的要素により否定の目的節を形成している。

ウルドゥー語とグイ語ではそれぞれ不確定未来の否定、非現実の否定語、が用いられるという。ウルドゥー語の不確定未来の否定 *na* は目的節内の否定と推量の否定に、グイ語の非現実の否定語 *cī* は禁止にも用いられるという点に注意したい。

3. 連体修飾節

連体修飾節については、先行研究も多く、ここで十分整理して示すことはできないが、各項目ごとに（筆者が関連があると考えた）若干の先行研究の知見を示しつつ、今回のデータの分析を行っていくものとする。なお調査例文[26] [時間節]、[27] [場所節]については時間的・能力的な問題から分析を行うことができなかった。記してお詫び申し上げる。

3.1. 内の関係の連体修飾

Comrie and Kuteva (2005) は関係節化の手段に4つのタイプをあげ、世界の112の言語でのその使用を調査している。以下に4つのタイプを疑似日本語によって示し、その言語数も：の後ろに示す。

- ①関係代名詞型：[私は少女を教えている、その誰かがちょうど私たちに挨拶した（所の）。]：12
- ②削減なし型：24
 - ②(1)相関型：[私は少女を教えている、少女がちょうど挨拶したの（を）。]
 - ②(2)主要部内在型：[私は少女がちょうど挨拶したのを教えている。]
 - ②(3)並列型：[少女がちょうど挨拶した、（彼女が／少女が）私に教えられている。]
- ③代名詞残存型：[私は彼女がちょうど挨拶したところの少女を教えている。]：5
- ④ギャップ型：[私はちょうど挨拶した少女を教えている。]：125

Comrie and Kuteva (2005) は上記のタイプの地理的分布に関して、①が印欧語族の言語の中でもヨーロッパの言語に限られることを指摘している。ヨーロッパ以外ではグルジア語と北米のアコマ語しかなく、関係代名詞というものが世界的・類型論的にみるときわめてマイナーなものであることに驚かされる。データをみる限り④ギャップ型が世界的に圧倒的に優勢であり、②削減なし型はもっぱら新大陸に、③代名詞残存型はもっぱらアフリカに分布している。

Comrie and Kuteva (2005) は明言していないが、関係代名詞を使用する言語は、関係節が名詞に後続する言語に偏っている。Comrie and Kuteva (2005) [122 Relativisation strategies] と Dryer (2005b) [90 Order of relative clause and noun] を掛け合わせてみると、関係節後続で関係代名詞を使う言語が10であるのに対し、関係節先行で関係代名詞を使う言語は0である。もっとも多いのは関係節後続でギャップ型の言語(74)、次に多いのは関係節先行でギャップ型の言語(20)である。

以下では上記の先行研究の記述を踏まえて今回の調査の結果について分析する。

従属節の目的語において関係代名詞を使用していたのは下記の言語で、ヨーロッパの言語は全てここ

に属し、さらに印欧語のウルドゥー語が属す他には、マレーシア語、グイ語、エウエン語があった。これらの言語においても、従属節中の主語、場所、所有者においては関係代名詞がそのままでは使いにくくなる。それを整理したのが次の表 1 である。なお表中の「ゼロ」と「形動詞」は次で問題にするギャップ型の手法である。

表 1：内の関係の連体修飾に關係代名詞を用いる言語の被修飾名詞の統語的役割別の表現の分布状況

	目的語	主語	場所	所有者
ドイツ	関代	単文	前置詞＋関代	前置詞＋関代
フランス	関代	関代	前置詞＋関代	関代属格
イタリア	関代	関代	関係副詞	前置詞＋関代 or 関代+have
スペイン	関代	冠詞＋関代 (疑似分裂文)	前置詞＋関代 or 関係副詞	前置詞＋関代
フィンランド ⁶	関代 or 動作主分詞	単文	関代＋ <u>内格</u>	関代属格
アイスランド ⁶	関代 or 過去分詞	単文	there＋関代	関代+be with broken leg
ロシア	関代	単文	関係副詞 or 前置詞＋関代 or 単文	前置詞＋関代 or with broken leg
ウクライナ	関代 (不変化)	関代	関係副詞 or 前置詞＋関代	前置詞＋関代
ポーランド ⁶	関代	単文	関係副詞 or 前置詞＋関代	with broken leg
ブルガリア	関代	関代	前置詞＋関代	前置詞＋関代
チェコ	関代	単文	前置詞＋関代	with broken leg
ラトビア	関代	単文 or 関代	関係副詞	関代与格+be broken leg
リトアニア	関代 or 受動分詞	関代	関代 <u>処格</u>	関代属格
ウルドゥー	関代 or 分詞	関代 or 分詞	関代	関代属格
グイ	関代 or 属格	関代 or 属格	関代 or 属格	関代 or 属格
エウエン	関代	<u>形動詞</u> or 単文	関代	関代 (二重)

このような分布の状況が現れた理由について、以下に若干の考察を加える。

まず [目的語] の場合、現在も SOV 語順のウルドゥー語、グイ語、かつてウラル祖語では SOV だったフィンランド語に分詞等、関係代名詞以外の手段が現れている。これは SOV と連動する前置修飾 (AN) の語順がその手段に反映しているものと考えられる。リトアニア語にはウラルの基層が考えられる。アイスランド語については理由がわからない。なおグイ語は従属節中での役割に関わらず一貫して同じ手法を用いていることがわかる。

次に [主語] の場合、そもそも複文でなく、単文で表現する言語の多いことがわかる。例えば、英語で考えると、‘Who [is the person that] brought that book?’ の [] 内を省略しても自然な単文が得られる。逆に [] 内を表現するとまわりくどい不要な疑似分裂文を作ることになる。他方、日本語で「その本を買ってきた [のは]、誰？」という文の [] 内を省略すると文として成り立たない。「誰がその本を買ってきた [の] ?」のような語順の文でも、むしろ [の] があって疑似分裂文のようになっているほうが文として安定している感じがする。この問題についてはさらに深く分析・考察していく必要があるが、このように従属節中の主語を関係節化する場合に、後置修飾で関係代名詞を使用する言語では単文の方が

自然になるという傾向があるといえるだろう。このことはこれらの言語で、特に SVO 語順の言語の場合に、S が主題兼主語の性格を強く示し、デフォルトの文が有題文であることと深いつながりがあると考えられる。このことに関しては風間 (2019) も参照されたい。なおマレーシア語では先行詞のない疑似分裂文となっている。

次に[場所]の場合、まず関係代名詞自体に格変化がある言語が存在するが、これはフィンランド語とリトアニア語である。フィンランド語は格の多いウラル語族の言語であり、15の格を持つが、リトアニア語はここでも基層言語であるウラルから受けた影響を示しているものと考えられる。次に注目すべきはアイスランド語で、関係代名詞はもっぱら‘sem’一つしかなく、しかもこの関係代名詞は「前置詞と直接結合しない」(秦 (1988: 3)) という。このため、[場所]でも[所有者]でも「前置詞+関係代名詞」の形をとることができず、前後の要素でこれを補っているものと思われる。

「前置詞+関係代名詞」を用いるか、関係副詞を用いるか、という選択の状況についてみると、その理由を想定させるような一貫した分布がみられない。理屈から考えると、西ヨーロッパの孤立型の言語において「前置詞+関係代名詞」の分析的表現がより好まれ、東ヨーロッパのより統合的な言語で関係副詞が好まれる、というような状況になってもよいと考えられるが、そのようにはなっていない。イタリック語派、スラブ語派、バルト語派の中でもその選択は分かれていて、語派における一貫性も観察されない。

最後に、[所有者]の場合では、語派によるはっきりとした違いが観察できる。まずスラブ語派では関係代名詞を使わずに、[with broken leg]のような前置詞句によって表現することが多く行われている。格変化を多く残しているバルト語派では関係代名詞の属格が用いられる。他方、格変化を失っているイタリック語派では基本的に「前置詞+関係代名詞」が用いられる(ただしフランス語における関係代名詞の属格についてはさらにその位置づけについて考慮する必要があるだろう)。

次に、ギャップ型の言語における内の関係の連体修飾、およびそこでの[目的語]、[主語]、[場所]、[所有者]間での違いについてみよう。ギャップ型の場合、関係代名詞や関係副詞がないので、それを従属節における[目的語]、[主語]、[場所]、[所有者]のような役割に応じてどのような形にするか、ということは全く問題にならない。全て連体形もしくは形動詞と呼ばれる分詞的な形式で一律に前から修飾すればよい。このことはまずこれらの言語が一貫して主要部後置であり、どのような修飾要素も被修飾要素に常に前置されることが保証されているため、上記のような状況が可能になっていると考えられる。

Keenan and Comrie (1977) が提唱する関係節化の接近階層(主語>直接目的語>間接目的語>所有者)によると、主語での関係節化は他の位置での関係節化より簡単に起こり、直接目的語での関係節化は間接目的語などでの関係節化より簡単に起こる。接近階層をみて考えられる一般化の1つは、代名詞保持の手段は階層の末端で好まれるということである。

したがって今回のギャップ型の言語のデータにおいて唯一問題になるのは、[23]「足が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった」において「足」と「イス」の関係がわかりにくいという点であり、いくつかの言語(モンゴル、タタール、ナーナイ、ソロン、グイ)では「足」に所有の表示がなされていることが観察される。

なおモンゴル語では肯定・現在の名詞述語文ではコンピュータを用いないため、「AはBです」は単に「A B」のように示されることになるが、連体修飾が入り込んできて文が長くなるとAとBがどこからどこまでわかりにくくなる。このため[22]「この部屋が私たちの仕事をしている部屋です」では bol, =čin のような主題提示要素が現れて主題と題述の切れ目を明確にしていることが観察される。

中国語は、Comrie and Kuteva (2005) ではギャップ型に分類されているが、文的な要素を的 de によ

て名詞化してこれを名詞の前に置き、同格構造によって名詞を修飾する。VO 語順の言語では一般に関係節は後置されるのが普通であるが、中国語は数少ないその例外である。これは橋本 (1989) のいうように、中国語が漢語の下層の上にアルタイ諸言語、特に満洲語の影響を強く受けて成立した言語であるためであろう。[23]では、“的”de による表現だけでなく、“那把椅子断了一条腿, 扔掉了”のように“把”構文を用いて時系列順に述語を連続させた構文(孤立型の言語らしい構文である)も別のバリエントとして提示されていた。

最後に、アラビア語は Comrie and Kuteva (2005) のいう③代名詞残存型であるが、これは[目的語]、[場所]、[所有者] 場合で、[主語] だけは冠詞の一致による同格構造となる。なお本題からは外れるが、チュルク諸語の中にあつてオグズ語群の特にトルコ語においては、従属節中に主語があるかないかによって異なった形動詞が用いられる。アラビア語における上記の違いを鑑みると、このことはアラビア語の影響によって生じた可能性もあるのではないかと考える。

3.2. 外の関係の連体修飾と内の関係の連体修飾、補文節、引用節の四者間の関係の対照

寺村によるいわゆる外の関係の連体修飾は、欧米の印欧語族の言語では一般に補文標識によって示され、内の関係の連体修飾、すなわち関係節とはその表現方法において断絶している。他方、こうした言語では「知っている」、「思う」などの知識・思考の動詞がとる補文節や「言う」などの言語活動の動詞がとる引用節も同じ要素(補文標識に酔る補文)によって示される。一部の言語では「見る」、「聞く」などの知覚動詞がとる補文節も同じ要素によって示される。他方、上記の④ギャップ型を用いる諸言語の中には、この方法が the Fact-S 構造(「外の関係の連体修飾」と同じものを指す)をはじめとする一連の表現における唯一の手段である言語(日本語やそれに類型論的に類似したタイプの言語も多くここに含まれる)が存在し、これが当該言語では一般的な名詞修飾の節構造であるという(Comrie and Kuteva (2005: 495))。

そこで今回の調査データでは、関係節/内の関係の連体修飾節([目的語])と the Fact-S 構造/外の関係の連体修飾節(「音」・「噂」)、補文節(視覚・聴覚・知識)、引用節(間接話法)の4者の異同の関係を調査し、整理して示すことにする。

なお若干の注記のあることを表中に*によって示し、その説明は表の下に示した。

略号は以下のとおりである。

関代：関係代名詞、補：補文標識(how とあるものは英語の‘how’にあたるものを使用)、前：前置詞、同時：同時を示す副詞節など、接：接続詞、属：グイ語における名詞化の機能も併せ持った属格、対：グイ語における名詞化の機能も併せ持った対格、《言って》：歴史的もしくは共時的に「言う」という動詞の副動詞形などから発達した引用節標識、inf: infinitive、NMLZ: nominalizer、N: noun、acc: accusative、gen: genitive

表 2：外の関係の連体修飾節および「補文節」、引用節の標示方法の分布状況

	内 [目的語]	外「音」	外「噂」	補文節			引用
				視覚	聴覚	知識	間接話法
ドイツ	関代	inf/補 how	補	inf/補 how	inf/補 how	補	補
アイスランド	関代	inf	補	inf	Inf	補	Inf
フランス	関代	inf	補*	inf	Inf	補	補
イタリア	関代	inf/補	補	inf/補	inf/補	補	補 or 前 inf
スペイン	関代	前+関代 or 分詞	補	inf/補	inf/補	補	補
ロシア	関代	補 how or N	補**	補 how	補	補	補
ウクライナ	関代	N	補	補 how	補 how	補	補
ポーランド	関代	N	補	補	補	補	補
チェコ	関代	N	補*	補 how	補 how	補	補
ブルガリア	関代	補 how or N	補	補 how	補 how or da 構文	補	補
ラトビア	関代	補 or 分詞	補	補 how or 分詞	補 how or 分詞	補	補
リトアニア	関代	補 how or 分詞	補**	補 how or 分詞	補 how or 分詞	補 or 副分詞	補 or 分詞
ウルドゥー	関代	inf+gen	補/inf+gen	分詞	分詞	補	補
フィンランド	関代	分詞 acc or 同時 or N	補	接 or 補 or 分詞	接 or 補 or 分詞	補 or 分詞	補 or 分詞
アラビア	残留型	ゼロ or N	補	同時	同時	補	補
中国	“的”NMLZ	ゼロ目的語化	ゼロ主語化	ゼロ目的語化	ゼロ目的語化	ゼロ目的語化	ゼロ目的語化
朝鮮	連体	連体	トイ連体	連体+コト	連体+コト	連体+コト	《言って》
モンゴル	形動詞	形動詞	トイ形動詞	形動詞 acc	形動詞 acc	形動詞 acc	《言って》
タタール	形動詞	動名詞	トイ形動詞	形動詞 acc	形動詞 acc	形動詞 acc	補
ソロン	形動詞	形動詞	トイ形動詞	形動詞 acc	形動詞 acc	形動詞 acc	《言って》 or 形動詞 ref
エウエン	関代	2 文	2 文	補 how	補 how	形動詞 acc	形動詞 ref
ナーナイ	形動詞	2 文	2 文	形動詞 acc	形動詞 acc	形動詞 acc	《言って》
マレーシア	ゼロ	ゼロ	補	ゼロ目的語化	ゼロ目的語化	補 or ゼロ目的語化	補 or ゼロ目的語化
メ	形動詞	形動詞	形動詞	同時 or 限定詞 or ゼロ	同時 or 限定詞 or ゼロ	限定詞	ゼロ目的語化
ガイ	関代 or 属		関代	対 or NMLZ	対 or NMLZ	対 or NMLZ	V 対

*関係代名詞等の現れが二重になっている。

**先行詞がない方がふつう。

上に述べたように、ヨーロッパの印欧語族の言語（基本的に VO（語順の）言語）では、内の関係の連体修飾と、表においてその右側に位置する諸表現の間に大きな対立があり、右側の諸表現は主に補文によって示される。補文は一種の名詞化であり、（外の関係など）連体的な場合、それは主名詞と同格の関係に立ち、引用や知覚・知識動詞の補語の場合それらは直接目的語相当である。

これに対し、アルタイ型の言語（日本語、朝鮮語、アルタイ諸言語など、基本的に OV 言語）では、表における一番右の引用節とその左側に位置する諸表現が対立し、左側の諸表現はもっぱら連体形や形動詞を用いて示される。（外の関係など）連体的な場合、それは修飾語として機能し、引用や知覚・知識動詞の補語の場合、それらは連体形や形動詞に格を付加することによって示される。

すなわち、両タイプの相違は表における境界の位置が異なっているだけではない。VO タイプでは長い修飾語が主名詞に先行することが好まれないために、連体修飾複文の形成において修飾構造ではなく、後置した同格構造を用いる。他方 OV 言語では長い修飾語が主名詞に先行することも問題ないので、単文における形容詞の修飾などと同じ修飾構造を用いる。

補文節においては両タイプの間に大きな違いは起こらない。VO 型言語は補文節をそのまま目的語とし、OV 型言語は格を用いて目的語とする。ただし OV 型言語の中で、形容詞が動詞型であるか形容詞型であるかによって、形式名詞を用いてそれに格を接続するか、用いないで直接格を接続するかの違いはある。なお上記で問題にしたように、OV 型言語では VO 言語のそれとは使われる範囲も機能も異なっているので、「補文」および「補文節」という語を通言語的に用いることは正しくないと考えられる。本稿ではあくまでも便宜的にこの用語を広い意味で使用していることをことわっておく。

他方、引用節では両タイプの違いが問題となる。このことは 3.3. 節で触れる。

OV 型言語でも、その語順の制約がより厳しいゲルマン語派とイタリック語派の両語派の言語では、知覚動詞の構文に不定詞が使われ、知覚内容の中の行為者が直接目的語として取り上げられた表現となる（表中の四角で囲った部分）。この理由については 3.4. 節で考察する。

3.3. 直接話法・間接話法

3.2. 節で分析したように、ヨーロッパの印欧語において、引用節は直接目的語となる。英語における動詞 ‘say’ は他動詞として that 節をとり、その疑問は ‘What did you say?’ となる。これに対し、日本語やアルタイ諸言語の多くにおいて引用節は副詞的に振る舞う節であり、アルタイ諸言語の多くにおいて引用節の標識は歴史的もしくは共時的に「言う」という動詞の副動詞形などから発達した形式を示している（近畿や広島の方言にも「ゆうて（言うた）」のように同様の引用標識がある）。

筆者は、ヨーロッパの印欧語において間接話法で時制やダイクシスの調整が必要なのは、引用節が目的語である補文節であり、主節の動詞に直接支配されているためではないかと考える。これに対し日本語などでは必須項でないため、直接話法と間接話法の境界がはっきりしないのだと考える。

以下の 1)~4)の文は、筆者の内省においては、どれも同じ意味で使用することができる。すなわち例えば 1)と 3)において、「明日」は発話時点における今日のことを示す。

- 1)「昨日オレは、明日もオレが来れば全部片付くだろうって言ったけど、なかなかそうも行かないねえ」
- 2)「昨日オレは、今日もオレが来れば全部片付くだろうって言ったけど、なかなかそうも行かないねえ、」
- 3)「昨日オレは、明日も自分が来れば全部片付くだろうって言ったけど、なかなかそうも行かないねえ、」
- 4)「昨日オレは、今日も自分が来れば全部片付くだろうって言ったけど、なかなかそうも行かないねえ」

ただ、これは「なかなかそうも行かないねえ」という現状への認識が加わっているため、語用論的に解釈が限定されているのかもしれない。5)は発話時点からみても明日も指せるように感じる。しかし 6)では「来る」の時制になっているためか、「今日」を発話時点からみた昨日と解釈することは難しいよう

だ。

- 5) 「昨日オレは明日も来るって言ったよね」
- 6) 「昨日オレは今日も来るって言ったよね」

これに対し、「～(こと)を伝える」のように引用内容を形式名詞によって対格目的語とすると、主文の動詞による支配は強まり、間接話法的な解釈しか許さなくなるようだ。7)の「明日」は発話時点からみての明日のように感じられる。

- 7) 「昨日オレはこの人に、明日も来ることを伝えましたよ」
- 8) 「昨日オレはこの人に、今日も来ることを伝えましたよ」

他方、時制の一致は全く適用できないようだ。このことはヤコブセン (2011: 11) にあるように、話者の視点になっている基準時が過去になっているためだと考えられる。10)でも 12)でも客が来たことは下線部から明らかであるが、12)のように目的語内の節にしても時制は過去形にならない(伝えた時点ですでに客はすでに来てしまっていて、そのことを伝えたという意味になる)。

- 9) 「今日はあいつが来^ると思ったんだ、で、やっぱり来た」
- 10) 「*今日はあいつが来^たと思ったんだ、で、やっぱり来た」
- 11) 「今日客が来^ることは伝えておいたから、接客もスムーズにやってくれたようだ」
- 12) 「#今日客が来^たことは伝えておいたから、接客もスムーズにやってくれたようだ」

今回のデータの分析を通して、上記の仮説を検証を試みようとしたが、調査例文にいろいろと不十分な点があり、準備不足は否めなかった。そこで今回は間接話法とされている方の引用節中で、直接話法の引用節中の「今日」が「昨日」もしくは‘the same day’のような表現になっているか、時制がはっきりと過去完了などになっているか、という点について調べた。はっきりしない言語、疑わしいものは除き、上記の違いが明確に表れている言語のみを選んだ。結果は下記である。

上記の両特徴に関して間接話法的：ドイツ、フランス、スペイン、フィンランド、中国、グイ
「昨日」に関してのみ間接話法的：ウクライナ、アラビア

上記の結果について、OV 言語で間接話法が明確な言語はみいだされなかったということは言えるだろう。グイ語は「今日過去」、「昨日過去」などの細かい時制の区別を持っているため、はっきりとした違いが観察できた。直接話法／間接話法の区別は、ヨーロッパの印欧語においてより厳密であるように思われるが、世界の他地域・他の系統の諸言語の十分な検討が必要である。

3.4. 主要部内在型関係節

主要部内在型関係節(以下、「内在節」とする)は、基本語順が SOV の言語にのみ存在するという説がある(Keenan (1985: 161-163))。さらに SOV の中でもさらに pro-drop の言語に限定されているという説がある(黒田 (1999 [2009: 294, 296]))。

まず今回の調査対象の言語の中で、はっきりと内在節の存在を示していたのは、メエ語とグイ語だけであった。風間 (2017) ではツングース諸語のうちのナーナイ語とモンゴル語で内在節が可能であることを示したが、積極的に使用されるわけではないようだ。同じくツングース諸語のうちのエウエン語でも Malchukov (1995) が内在節の存在を指摘している。風間 (2017) では助詞を全て落とした場合に限って、朝鮮語でも内在節が言えることを指摘した。上記のように、黒田 (1999) は内在節が Pro-drop で SOV 語順の言語に、Keenan (1985: 161-163) はやはり SOV が基本語順の言語にのみ存在するとしている。

今回の調査における上記の5言語は全部SOVが基本語順の言語のようである。他方、グイ語はPro-dropの言語ではなく、黒田(1999)の説の反証となっている。

他に注目すべき言語としては、フィンランド語があり、そこでは目的語が対格になるとともに分詞も対格となって一致を示していた。ラトビア語では知覚動詞でないにもかかわらず対格の対象と不変化分詞による構文が用いられていた。

風間(2017)では、内在節に関して次のような点を指摘した。

- ・内在節を持つ言語では、知覚動詞などでも同じ構文が観察され、構文的な連続性があること
- ・内在節に使われる準動詞形がモノもコトも示せることが内在節成立の要因になっていること

これに対しVO語順の制約の厳しい欧米の印欧語(3.3.節でみたゲルマン語派とイタリック語派の言語)は知覚構文において一般的な補文を取らず、思考動詞等の構文との違いをみせるが、今回の調査から、その理由はこれらの言語が「補文的内容の中にその動作主としての具体的な知覚対象があり、それを目的語にできる可能性があれば、できるかぎりそれを目的語にする」という傾向を持っているためではないかと考えた。すなわち、そもそもSVO語順の言語は他動詞優勢であるが(風間(2019:155-162))、さらにVと具体物としてのOを接近させようとする傾向がある。これは補文構造をデフォルトとみなせば、一種の昇格(raising)とみることもできるだろう。

このことは①知覚構文、②外在型/内在型関係節、③部分への働きかけにおける全体と部分の選択、に共通して、SOV型言語とSVO型言語の違いとなって現れるものと考えられる。

①知覚構文

英：I **have seen** **him** run away. 日：私は**その人が走って行くの**を見た。

②外在型/内在型関係節

英：I ate **the apple** which was on the table. 日：私は**リンゴがテーブルの上にあったの**を食べた。

③部分への働きかけにおける全体と部分の選択

英：I **hit** **him** on the shoulder. 日：私は**彼の肩**をたたいた。

これに対し、思考動詞などが補文を取っている場合は具体的な対象を目的語にできないために構文が変わってくる。これは今回調査のアラビア語において全く並行した現象が観察された。

英：*I know him come here in this morning. I know that he came here in this morning.

これは、後ろから修飾する長い語句がどこで終わるのかを示すことが難しく、文的な要素をそのまま目的語等にすることができないSVO型の言語と、文的な長い語句でもhead-finalの特性からその範囲の把握が聞き手にとって容易であり、容易に長い語句を項にすることができるSOV型の言語の違いであるということができよう。見方を変えれば、主要部先行型のSVO型言語では、そのSVOの骨組みをなるべく簡潔な形で文の先頭において示そうとするのに対し、主要部後置のSOV型言語では、従属節の中に主節の動詞にとっての直接の対象が存在しても、SOV・ANの語順を破壊してでもその対象を従属節の右側に外置しようとはしないということになる(ただし内在節/外在節の選択では外在節の方が一般的なようである)。

3.5. 時間節

Cristofaro(2005)では、When節の中の述語が独立した文や複文の内の主節に現れる述語動詞と全く同等の述語動詞である場合にこれを「同等(balanced)」とし、他方、人称の一致やTAMなどの一部もしくは全部を失ってしまう場合にこれを「格下げ(deranked)」として、174言語についての分析・調査を行った。Cristofaro(2005)は地理的分布の傾向などについても記述しているが、筆者には顕著な分布やそ

の明確な理由があるようには思えない。

今回、時間節と場所節に関しては分析を行うことができなかった。次回の課題としたい。

4. 形容詞

形容詞に関しては、比較級と最上級についてデータを分析した。

4.1. 比較級

まずいわゆる形容詞の「比較級」の形式に関して、Stassen (2005b: 491) は次のように述べる：「大半の言語では、そのような明確な標示はない。特別の接辞を持つのは、英語、ドイツ語、オランダ語の ‘-er’、ラテン語の ‘-ior’、ハンガリー語の ‘-bb’、バスク語の ‘-ago’ などほぼヨーロッパのみの現象で、特に小辞比較構造を持つ言語に多い。比較接辞の語源はたいてい不明である。」

Stassen (2005b: 490-491) は比較の基準となる名詞およびその名詞のとり形式（すなわち英語で *than*、日本語で「より」のところに出現する要素）に注目した。① ‘from’ や ‘out of’ といった意味のマーカーをとる場合これを「場所比較 (locational comparative)」② ‘to exceed’ や ‘to surpass’ といった意味を持つ他動詞の直接目的語となる場合これを「優勢比較 (exceed comparative)」③ 「A は大きく、B は大きくない」もしくは「A は大きく、B は小さい」のような表現をとる場合これを結合比較 (conjoined comparative) ④ その他の英語の ‘than’ のような比較の対象専用の要素を用いるものを「小辞比較 (particle comparative)」と呼び、167 言語についてこの観点から分類した。結果は①場所比較：78 言語、②優勢比較：33 言語、③結合比較：34 言語、④小辞比較：22 言語となった。地理的にみると、④小辞比較はヨーロッパに限られている。③結合比較はオーストラリアとニューギニア、アマゾン流域に多い。②優勢比較はほぼ二つの地域、つまりサブサハラのアフリカと中国・東南アジアに限定されている。①場所比較は北アフリカとユーラシアの大部分（中東とインドを含み、ヨーロッパを除く）で優勢で、その他世界各地に広く分布している。

筆者は、この分布について次のように考える。まずサブサハラのアフリカと中国・東南アジアは孤立型言語の集中地帯である。孤立型言語では文法的要素も独立性の強い語であり、動詞連続が頻繁に使われるため、「to exceed」や「to surpass」といった意味を持つ他動詞を使用はするのは自然なことだろう。次に、インドを含むユーラシアにはアルタイ型の SOV 語順の言語が分布し、これらの言語は比較的格の数が多い（風間 (forthcoming)）。格の数が多い理由は場所を示す格が多いためであり、これらの言語が「場所比較」の方策をとることも自然なことだと考えられる。

今回の調査データに関しては、まず（比較を示す）形容詞の形に注目して分類を行ってみた。その結果は次のとおりである。

A. 接辞による言語：ドイツ、フィンランド、アイスランド、ロシア、ウクライナ、ポーランド、ブルガリア、チェコ、ラトビア、リトアニア、アラビア、タタール、ナーナイ、エウエン

B. 分析的形式 (“more”) による言語：フランス、イタリア、スペイン、マレーシア

C. 上記のいずれも用いない言語：中国、朝鮮、モンゴル、ウルドゥー、グイ、ソロン

なおメエ語は上記の③結合比較を用いていた。エウエン語およびナーナイ語の形式は必須のものではなく、本来指大辞や選別形「～の方」、「やや～だ」のような意味を示すものなどであり、媒介言語のロシア語に引かれて付加されたものと思われる。しかし先行研究のいうように必ずしもヨーロッパの言語に限られるわけではなく、アラビア語やタタール語にも観察された。ただし必須であるかなど、さらに検討すべき問題はある。このことは分析的な形式についても言える。

次に Stassen (2005b: 490-491) のいう比較の基準となる名詞の取る形式についてみると、結果は次のよ

うになった。

①：モンゴル、ウルドゥー、アラビア、タタール、マレーシア、エウエン、ソロン

②：中国

③：メエ

④：ドイツ、フランス、イタリア、スペイン、フィンランド、アイスランド

④もしくは①：ロシア、ウクライナ、ポーランド、ブルガリア、チェコ、ラトビア、リトアニア、朝鮮

ほぼ Stassen (2005b) の指摘したような分布になっていることが確認できる。

4.2. 最上級

今回のデータにおける形容詞自体およびそれを取り巻く語による最上級の表現を整理したところ、次のような結果となった。

A. 接辞による言語：ドイツ、フィンランド、アイスランド、ウクライナ、ポーランド、ブルガリア、チェコ、ラトビア（比較級と同じ形+限定）、リトアニア、アラビア（比較級と同じ形）、タタール、エウエン

B. 分析的形式（“more”）による言語：フランス、イタリア、スペイン、ロシア（+比較級と同じ形）、中国、朝鮮、モンゴル、ナーナイ、ソロン

C. 上記のいずれも用いない言語：ウルドゥー、グイ

下線の言語は定冠詞を伴う言語である。なおマレーシア語には接辞と分析的形式の二様の表現があるという。タタール語とエウエン語を除けば、接辞による最上級を持っているのはもっぱらヨーロッパの言語に限られ、さらにフィンランド語を除き印欧語族の言語であることがわかる。印欧語族でもイタリック語派の言語は変化の多くを失い、分析的になったが、ここでもその特徴が反映していることがわかる。

参考文献

欧文

Comrie, Bernard and Tania Kuteva. 2005. 122-123 Relativisation strategies. *WALS*. 494-501.

Cristofaro, Sonia. 2005. 126 ‘When’ clauses. *WALS*. 510-513.

Dryer, Matthew S. 2005a. 112 Negative morphemes. *WALS*. 454-457.

Dryer, Matthew S. 2005b. 90 Order of relative clause and noun. *WALS*. 366-369.

Dryer, Matthew S. 2005c. 81 Order of subject, object, and verb. *WALS*. 330-333.

Dryer, Matthew S. 2005d. 96 Relationship between the order of object and verb and the order of relative clause and noun. *WALS*. 390-393.

Haspelmath, Martin. 2005. 115 Negative indefinite pronouns and predicate negation. *WALS*. 466-469.

Haspelmath, Martin et al. 2005. *World Atlas of Language Structures*. Hong Kong: Oxford Univ. Press.

秦宏一 1988. 「アイスランド語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典』第1巻. 1-6. 東京：三省堂.

Hopper, P. J. and S. A. Thompson 1980. Transitivity in grammar and discourse. *Language*. 56: 251-299.

風間伸次郎 2017. 「アルタイ型言語における主要部内在型関係節について」 北方研究教育センター(編) 『北方人文研究』 10: 3-33.

風間伸次郎 2019. 「語順と情報構造の類型論」 『日本語の格標示と分裂自動詞性』 141-175. 東京：くろしお出版.

風間伸次郎 forthcoming. 「言語類型論からみた日本語の格」 『日本語の格表現』 東京：くろしお出版.

Keenan, Edward 1985. Relative clauses. *Language typology and syntactic description. vol. 2*. Timothy Shopen (ed.). Cambridge: Cambridge UP. 141-170.

- Klima, E. S. 1964. Negation in English. In J. A. Fodor and J. J. Katz (eds.) *The structure of language*. Englewood Cliffs, N. J., Prentice-Hall. 246-323. (筆者未見)
- Koptsevskaja-Tamm and Wälchli (2001) Circum Baltic languages: An areal-typological approach. in Östen Dahl and Maria Koptsevskaja-Tamm (eds.) *The circum-Baltic languages*. Vol. 2. *Grammar and typology*. 615-750. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- 黒田成幸 1999. 「文法理論と哲学的自然主義」 ノーム・チョムスキー, 黒田成幸『言語と思考』93-134. 松柏社. [黒田 (2005) 所収]
- 黒田成幸 2005. 『日本語から見た生成文法』東京：岩波書店
- Malchukov, A. L. 1995. *Even*. (Languages of the world, Materials 12). Newcastle: Lincom Europa.
- Miestamo, Matti. 2005a. Standard negation: the negation of declarative verbal main clause in a typological perspective. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Miestamo, Matti. 2005b. 113 Syntactic and asymmetric negation. *WALS*. 458-461.
- Miestamo, Matti. 2005c. 114 Subtypes of asymmetric standard negation. *WALS*. 462-465.
- Miestamo, Matti. 2007. Negation: an overview of typological research. *Language and linguistics compass* 1/5, 552-570.
- Payne, John R. 1985. Negation. In Timothy Shopen (ed.) *Language typology and syntactic description*. vol 1. I, Clause structure, 197-242. Cambridge: CUP.
- Stassen, Leon. 2005a. 118 Predicative adjectives. *WALS*. 480-483.
- Stassen, Leon. 2005b. 121 Comparative construction. *WALS*. 490-493.
- Van der Aurora, Johan, Nina Dobrushina and Valentin Goussev. 2005. 71 The prohibitive. *WALS*. 290-293.
- ヤコブセン, ウェスリー・M. 2011. 「日本語における時間と現実性の相関関係—「仮定性」の意味的根源を探る—」『国語研プロジェクトレビュー』5. 1-19.

[アンケート例文]

1. これは私の本ではない。[名詞述語文／コピュラ文の否定]
2. この部屋には椅子がない。[存在文の否定]
3. この部屋には一つも椅子がない。[全部否定・モノ]
4. その部屋には誰もいない。[全部否定・ヒト]
5. その本はこの部屋にない。[所在文の否定]
6. この犬は大きくない。[形容詞文の否定]
7. この犬はあまり大きくない。[形容詞文の部分否定]
8. この犬はあの犬より大きい。[比較級]
9. この犬がその犬たちの中で一番大きい。[最上級]
10. 今日はあの人は来ない。[自動詞文の否定]
11. あの人はその本を持って行かなかった。[他動詞文の否定]
12. 全ての学生が参加しなかった／学生は全員参加しなかった。[数量の全部否定]
13. 全ての学生が参加したわけではない。[数量の部分否定]
14. (私は買わなかった。しかし、決して) 値段が高いというわけではない。[文の否定]
15. 走るな！ [禁止]
16. 大きな声を出すな！ [他動詞文の禁止]
17. 明日は雨は降らないだろう。[推量の否定]
18. あの人に聞こえないように、小さな声で話してくれ。[目的節の否定]
19. 私はあなたを怒らせようと思ってそう言ったんじゃない。[否定のスキープの調節]
20. 私が昨日買って来た本はどこ(にある)？ [内の関係の連体修飾節・目的語]
21. その本を持って来た人は誰(か)？ [内の関係の連体修飾節・主語]
22. この部屋が私たちの仕事をしている部屋です。[内の関係の連体修飾節・場所]
23. 足が一本折れたあの椅子はもう捨ててしまった。[内の関係の連体修飾節・所有者]
24. ドアを叩いている音が聞こえる。[外の関係の連体修飾節]
25. あの人が結婚したという噂は本当(か)？ [外の関係の連体修飾節]
26. 私はその人が来た時にご飯を食べていた。[時間節]
27. 私はその人が待っている所に行った。[場所節]
28. 私はその人が走っていったのを見た。[補文節・視覚]
29. 昨日の夜、私は彼らがしゃべっているのを聞いた。[補文節・聴覚]
30. 私はその人が昨日ここに来たことを知っている。[補文節・知識]
31. (昨日)彼は彼が今日ここに来たと言った。／(昨日)彼は、「私は今日ここに来た」と言った。[補文節・直接発話／間接話法]
32. 私はリンゴが(あの)皿の上にあったのを食べた。[内在節・従主・主目]
33. 私はネコが家に入ってきたのを捕まえた。[内在節・従主・主目]

執筆者連絡先:kazamas@tufs.ac.jp

原稿受理:2019年7月1日